

<原著>

日本語勉強における中国語話者の「母語干渉」について
— 構造的比較からアプローチ —

宋 榮芬

On the Problem of Mother Language Intervention during the Process of
Chinese Learning Japanese
— A Comparison Analysis from Structural Aspects —

Rongfen SONG

In the learning process of foreign language, the learners are always influenced by their mother language, the negative side of which is called "intervention". This paper sheds light on the problems of mother language intervention, such as the rhythm (Mora) of pronunciation, separation voiced sound from voiceless sound and pronunciation of Chinese character, in the Japanese learning process of Chinese-speaking learners.

Key words : Mora; Voiced Sound; Voiceless Sound, Aspirated Sound; Unaspirated Sound; Chinese-style reading of a character; the Japanese reading (of a Chinese character)

はじめに

比較研究の一環として、近畿医療福祉大学紀要12巻第1号で小論『中国語勉強における日本語話者の「母語干渉」について』を発表した。その際、外国語を習得する時、母語からの影響が避けて通れないことについて、いかに「正の移転」（プラス影響）を最大限に発揮させ、「負の干渉」（マイナス影響）を最小限に食い止めるかを課題として提出し、日本人話者が中国語を勉強する視点から検討した。主に、中、日言語の対照分析を通して双方の特徴を明らかにし、言語間の移転、特に母語干渉のメカニズムを突き止めようとした。今回、同じ主旨ではあるが、角度を変え、

同じ課題を中国語話者が日本語を勉強する立場から捉えてみた。学習者の母語から目標語へ移転するプロセスの中で現れた問題現象を見詰め、生成の原因を探る。さらにその裏には何か共通の、規則的なものがあるのではないか、あるならその対処法も考えたい。本稿により学生の授業を担当する先生方の参考となる知見を提供できれば幸いである。

学習者が目標語の学習中に受ける母語からの影響は、音声、文字の表現に限らず、文法、言語待遇表現、言語行動などの各方面にわたる。今回は、音声面に限り論を展開していきたい。文法面などの母語干渉については、次の場を設け、改めて論じたい。

1、音節構造の比較から学習者の「拍」 感覚の欠如を把握する

日本語を勉強する際、音声面によく問題視されるのは、外国人の「拍」感覚の欠如であろう。中国語話者に限らず、たいていの外国人学習者は、最初に、日本語の「拍」のリズムに容易に馴染めない。特に特殊音に当たる「促音」、「撥音」、「長音」拍のリズムは多くの学習者を悩ませてきた。これは、異なる言語の音節構造の違いに由来すると考えられる。

音節とは「それ自身のなかには切れ目がなく、その前後に切れ目の認められる単音の連続または単独の単音」という伝統的解釈である。¹⁾ 言語学では、「音声的な音節」ともいう。

しかし、伝統的音節の解釈に従えば、日本語の場合、「切り目がない単音」は音節というより「拍」という表現が適切である。「拍」は、大辞泉で「音韻論上の単位」と解釈されているが、実際に「日本語の仮名一文字に相当する単位である音韻的な音節につけられた用語でした」²⁾ 学術上、「音韻的な音節」ともいわれる。

つまり、中国語で音節が最小単位であることに對し、日本語では音節をさらに「拍」に切り出すことができるため、「拍」が最小単位になっている。この音声の最小単位こそ言語を認識する基本であり、音声リズムの基礎になる。そのため、学習者の母語と目標語の最小単位の構造を明らかにすることは、われわれが各々言語の特徴を把握する上で、目標語の感覚を速く身につける近道だと考える。先ず、日本語の「拍」の構造を考えよう。日本語は五つの母音しかないため、拍の構造は比較的簡単で、全部で5タイプである。³⁾

母音拍(v) ……………ア行
半母音+母音拍(sv) ……………ヤ・ワ行
子音+母音拍(cv) ……ア・ヤ・ワ行を除く直音
子音+半母音+母音拍(csv) ……拗音
特殊拍(N,O,R) ……「ン」「ツ」「ー」

どのタイプでも基本的に1拍には一つの母音のみである。従って、「拍」の最大の特徴は、「等時性」である。(各々の拍がおおむね等時間になること) 又、大抵、仮名1文字は1拍を表す。特殊拍もそれだけで1拍分である。

次に、中国語の音節構造を見よう。中国語の音節は前の小論で紹介したように、1200個ほどの数に上り、基本的な音節も400位ある。そして、単母音の数はもとより、二重母音、三重母音、鼻母音も数多くある。それにより構造も複雑である。主なタイプは以下の通り：

単母音(v) ……………[a]
二重母音(vv) ……………[ai]
三重母音(vvv) ……………[uai]
鼻母音=母音+鼻尾音(vn) ……………[an][an]
鼻母音=二重母音+鼻尾音(vvn) ……………[ian][iann]
子音+母音+鼻尾音(cvn) ……………[zang]
子音+二重母音+鼻尾音(cvvn) ……………[guang]
子音+母音(cv) ……………[ma]
子音+二重母音(cvv) ……………[zao]
子音+三重母音(cvvv) ……………[liao]

※(C=子音、V=母音、S=半母音、n=鼻音)

以上のタイプから、中国語の一音節は最小が一単音であり、最大が四つの単音で構成されることが明白だろう。

音節のタイプが違くと音節の長さも当然違ってくる。故に音節間の連続は均等的なリズムだと考えることは難しい。又、複合母音がある音節には、調音途中で音質の変化が見られる。以下の特徴がある。

「●主になる母音と従属的な母音により構成されるため、母音間に音の大きさの差があること。

- 主、副の母音で構成されているが、依然として一つの母音であり、分解して発音できないこと。」⁴⁾

従って、中国語の音声リズム感は音節の「均等性」ではなく、調音の滑らかさと「カタマリ」自体の抑揚（声調）にある。いわゆる「抑揚頓挫」のことである。

こういう構造上の相違から中国語話者の学習者は、日本語の拍のような、ほぼ均等分されたリズム感覚に慣れにくいと考えられる。学習者は頻繁に無意識的に母語のリズム感で日本語の単語を発声してしまう。

特殊拍についての発声誤りは、共通的な傾向が見られる。つまり、促音の「ッ」がよく脱落し、逆に要らないところに長音を付けてしまう。例えば、「カコウイイ」（格好いい）を「カコウイイ」と、「シッパイ」（失敗）を「シパイ」と言ってしまう。「オバ」（叔母）を言うつもりだが、「オバ」（御婆）になってしまう。「トショカン」（図書館）を「トショカン」と、「ジユギョウ」（授業）を「ジユギョウ」と言ってしまうなどである。

促音の「ッ」の拍がよく取られてしまう原因は、二つあると考えられる。

一つは中国語の音節には類似したものが皆無で、リファレンス出来るものがないため感覚が身につけることが難しい。その上「無声音」であることが認識されているため、発声しないまま「拍」を落としてしまうのだ。

もう一つは、日本語の音声習慣は中国語の音声習慣に相反したことである。前に触れたように、中国語音節の特徴は調音の滑らかさと音節の抑揚にある。それは、ただ単音節に限らず、多音節語にも適用される。つまり、一語として独立存在する限り、双音節語も、四音節語（四字熟語）も、音節間の切り目が認められるが、語の途切れは許さず、また、

途切れたら別語になるからだ。ところが、促音の「っ」「拍」は、まさに一語の中で途切れたので、中国語話者がある程度の練習を積み重ねない限り、習得することは難しい。

一方、要らないところに勝手に長音をつけてしまうことは、依然として母語の音声慣習に関係がある。「叔母」の[ba]の音は中国語の[bà]「爸」（父のこと）と似ている。そして父を呼ぶ時よく伸ばす習慣があるため、学習者は口滑らかかのように慣れたりリズムで1拍を伸ばしてしまおうと考えられる。「トショカン」（図書館）を「トショカン」といってしまうのは、「よ」と「ゆ」の弁別ができていないわけではなく、「書」の中国語の発音は[shu]であり、音節の長さが「しゅう」の拍に近いため、思わず伸ばしてしまうのではないか。又「授業（ジュギョウ）」を「ジュウギョウ」といってしまうのも同じ原因だと考えられる。「授」の中国語の発音は複合母音の[shou]で、音節の長さで「じゅう」の拍とほぼ同じであるためそうなるのだ。

正確なデータはないが、外来語と和語に比べ、漢語が長音の脱落は比較的少ない。「ユウメイ」（有名）を「ユメ」に、「リョウリ」（料理）を「リョリ」に、「ヨウジ」（要事）を「ヨジ」にした誤用はあまり聞いたことがないであろう。

調べると、「有」[you]「料」[liao]「要」[yao]等漢字の本来の中国語の音節は、全て複合母音だったことがわかる。つまり、日本語の「長音」は（外来語と和語を除けば）漢語の複合音節に対応するために、付けたのではないかと推測される。

又は、日本語の母音連続のことに関係ある。2拍がつづく、二つ目を弱くし、一音節のようにする傾向が学習者にはみられる。それは、中国語における複母音の発音法が存

在することに関係があるかもしれない。例：「イイエ = /i/i/e/」「舞子（マイコ = /ma/i/ko/）」のような日本語は、あくまでも /a/ と /i/、/i/ と /e/ が別々の母音であり、全体で均等の三拍のはずであるが、中国語には /ai//ie/ という複合母音があるので、中国語話者は中国式の連読で /i/ie/、/mai/ ko/ のように、均等の二拍に読みやすいのである。同様に「太陽（タイヨウ）/ta/i/yo/u/」の四拍も /tai/yao/ の二音節となる。

以上、中国語話者の「拍」感覚上の問題と原因をまとめた。問題を解消するには、多様な音声指導法を提案する。複合母音を個々に断ち切って発音すると均等性が体験できる。アクセントの練習に合わせると長音の個所がわかりやすくなるだろう。

2、音韻的構造から清音と濁音の混乱を整理する

中国語話者の日本語学習者にとって、音面で最も悩むのは、清濁のことに他ならない。

この問題を解決するため、中日両言語の音韻的構造の相違を究明しなければならない。

音韻論上には、ミニマルペアという言葉がある。それは、「ある音以外はまったく同じ音で構成されている二つのことばで、意味が異なる対」のことである。⁵⁾ どの言語にもこのような最小対が存在しているが、ここでは、中日両言語に関係ある点のみ検討しよう。

日本語において、一番明白なミニマルペアの存在は清濁の対立である。即ち、有声音と無声音（音を発する時、声帯が振動するのが有声音、振動しないのが無声音）の区別である。例えば、ガザダバ行は有声音、カサタハ行は無声音である。「か」（蚊）と「が」（蛾）は意味上の区別がある。

ところが、中国語の発音には、有気音と無

気音（子音を発する時、呼気が強く出るのは有気音、ほとんど出ず氣息の音が聞こえないのが無気音）の対立はあるが、日本語の有声音と無声音の対立はない。たとえ同じ [ga]/[ka]、[da]/[ta] のような対立があっても、音韻論の「音素の体系」上では中国語と日本語は異なっている。

日本語の「た」= 無声音 [ta]、「だ」= 有声音 [da] の音韻構造に対して、

中国語の“踏”は、[tà] と表示されるが、実際には /t^ha/ という有気音で、“大”は、[dà] で表示されても、実際には、無気音の /ta/ なのである。

現代中国語の標準語（普通話）には濁音（頭子音）が使用されなくなっているため、日本語の濁音のような声帯（喉仏）の振動について、中国語普通話の話者にはなかなか分かりにくい。（一部の方言にはまだ古漢語の濁音が保留されているため、そのような地方の出身者は別である。）

濁音は一般に無気音となっているため、多くの中国人学習者は、つつい有気音を以って無声音（清音）に、無気音を有声音（濁音）に代用して発音してしまう。

ところが、日本語の無声音の氣息は、語気が強まると強く感じられるが、いつも同じ強さを保っているわけではない。とくに、語中、語尾になる方は、語頭にある方より弱くなる傾向がある。例として、「たしか」、「あした」、「わたし」三つの言葉の中に出る「タ」という清音の氣息を比べてみよう。微妙な差が感じられるのではないだろうか。次の表1にまとめた。

表1 日本語、中国語の有声・無声、有気・無気音の比較

	無声有気音	無声無気音	有声無気音
日本語例	たしか [tasika]	あした [asita]	だるい [darui] なみだ [namida]
中国語例	踏 /tà/=[tʰa]	大 /dà/=[ta]	大 /dà/=[da]

※注：点線…で仕切られた区域は区別なし
実線—で仕切られた区域は区別あり

表1に示されたように、中国語と日本語は各自のはっきりと区別される境界線がずれている。中間部の無声無気音のところは日本語と中国語が重なっている。つまり、日本人にとって意味区別には役が立たない「氣息」の有無は、「無気」「有気」に敏感な中国人にとっては、鮮明な特徴であり、逆に無声・有気に対しては無頓着なのである。

そのため、息が出るかどうかにかんじて清濁を区分する中国語話者にとって、無声無気音（語中、語尾にある清音）と有声無気音（濁音）とは同じであると認識されている。無声音である清音なのに、語中、語尾にあると、濁っている音と感じられ、「アシタ」を「アシダ」に「ワタシ」を「ワダシ」のように聞きとっている。いつも、「濁点」があるかないかに、自信がない。つまり、「声帯振動」の有無がはっきり分別できないかぎり、学習者はいつまでも清濁の葛藤を覚えるのである。さらに、複合語に出会うとき、後ろの語の語頭の清音が濁音に変わるという連濁の規則を加えれば、学習者は、一層混乱しやすくなるのである。

3、漢語の読み方構造を再考する

中国語話者の学習者に限らず、ほとんどの外国人学習者が厄介だと感じるのは、語形と表記が必ずしも一対一に対応しているわけで

はないということであろう。

広辞苑によると、語形とは、「単語の外形。単語を音韻の連続したものとしてとらえ、単語がもつ意味などと区別していう」ものである。即ち読み方だ。包括的に言うならアクセントまで含まれるだろう。表記とは「文字や記号で表ししるすこと」である。⁶⁾ 日本語には、漢字のみ、漢字仮名まじり、平仮名のみというように書き表す方法がある。この中で、特に問題になるのは、漢字が絡むことである。つまり、平仮名のみ表記以外に、漢字の字面は同じでも複数読み方がある。例えば、「アシタ」「アス」「ミョウニチ」と三つの単語は同じ「明日」という漢字で表記できる。訓読みか音読みかの問題は、漢字さえ使えば、ほとんどの時、直面している。語彙の蓄積がそれほど多くない学習者にとっては、とても悩ましいことなのである。

中国語話者の学習者には、簡易に音読みにしてしまう傾向がよく見られる。例えば、「人気（ニンキ）のある歌手／商品／観光地」などのような読み方に慣れた学習者は「夜になると人気がない寂しい場所へ行かないように」の場合、「人気」を「ヒトケ」と読まず、「ニンキ」のままに読んでしまいがちである。二文字続く漢字の単語は、音読みの方が多いのであるが、音読みこそ、中国語話者の学習者にとって、大きな落とし穴と言えるだろう。

中日両言語の中に多くの同形同義の漢字が使われている。これは、幸いである反面、厄介なことでもある。幸いと言えば、同形同義の漢字は、たとえ初めて出会った日本語の文に現れていたとしても、学習者にとっては、手間をかけずにすぐ意味がわかるので都合である。しかし、学習者は漢字を見て、意思伝達ができやすいと同時に、読み方に慣れ親しんでいる母語に邪魔されやすいという厄介な問題が生じる。特に訓読みより音読みの方

は、誤読してしまうケースが多い。

その理由として、訓読みの方は中国語の発音と全く異なり、異質的であるので、学習者の注意を喚起しやすい。逆に、音読みの方は、発音が相似しているため、曖昧で混同されやすいと考えられる。

漢語中の本来（中国語で）鼻母音で発音される漢字を例として、音読みの構造を比べてみよう。

中国語の発音には「/ n / [n]」（前鼻音）と「/ng/[ŋ]」（後鼻音）で区別する二種類の鼻母音がある。つまり、ミニマルペアとしての存在である。ところが、日本語には撥音「/ n /」の一種類の鼻音しかないため、「民 /min/」と「明 /ming/」、「門 /men/」と「盟 /meng/」のような対になっている中国語に対し、日本語の音読みはどうなっているのか、表2を以ってまとめた。

表2で分かるように、⇔の左側の「/ n / [n]」に対応したのは、撥音の「ン」である。

同じ鼻音「/ n / [n]」で終わっても前に接続した母音により、微妙に変わったものがある。

右側の「/ng/[ŋ]」の代わりに長音「ーウ」または「ーイ」で対応してきた。それも前に接続していた母音に関係がある。[i]と[e]がある語は、「ーイ」「ーエ」になり、[a][u][o]がある語は、「ーウ」になるのである。

例のような長音の「ーウ」または「ーイ」で終わる日本語の音読みは、中国語本来の発音と比べると、鼻音は無くなったため、学習者にとって、注意しやすい。それに対して、鼻音のまま、撥音「ン」で終わる漢字は、中国語と変わらないものもあれば、わずかに変わるものもある。それで、逆に誤読をしがちである。

理由としては、日本語の母音「あ、い、う、え、お」の後に付ける撥音は /an//in//un//en//on/ のみ、中国語には複合母音 /ian//uan//yun/ もあるので、さらに子音を加える

表2 漢字鼻音のミニマルペアに対応した日本語の音読み形

中国語漢字	「民 [min]」	⇔	「明 [ming]」
日本音読み	「ミン [min]」	⇔	「ミョウ [miyou]」
中国語漢字	「門 [men]」	⇔	「盟 [meng]」
日本音読み	「モン [mon]」	⇔	「メイ [mei]」
中国語漢字	「印 [yin]」	⇔	「英 [ying]」
日本音読み	「イン [in]」	⇔	「エイ [ei]」
中国語漢字	「晩 [wan]」	⇔	「望 [wang]」
日本音読み	「バン [ban]」	⇔	「ボウ [bou]」
中国語漢字	「炎 /yan/」	⇔	「陽 /yang/」
日本音読み	「エン /en/」	⇔	「ヨウ /you/」
中国語漢字	「銭 /qian/」	⇔	「強 /qiang/」
日本音読み	「セン /sen/」	⇔	「キョウ /kyou/」
中国語漢字	「栓 /shuan/」	⇔	「双 /shuang/」
日本音読み	「セン /sen/」	⇔	「ソウ /sou/」

と日本語の撥音は対応切れなくなる。音読みといっても、まったく漢字本来の中国語の発音に一致することはないと考えられる。

したがって、辞書を調べず思い込みや推測で発音してしまうと、誤解の元になり、コミュニケーションの支障にもなってしまいます。よくあるのは、中国語式のままで発音すると「来年」(ライネン /rainen/) を /lainian/ に、「論文」(ロンブン /ronbon/) を /lunbun/ に、「運動」の(ウンドウ /undo:/) を /yundou/ に読んでしまうこと等である。

終わりに

以上音声学的な側面と音韻論的な側面から、中日両言語の音声構造の比較考察を通し、中国語話者が日本語を勉強する際に音声面でよく遭遇する問題を分析した。特に母語からのマイナス的影響を捉えた。中国語話者の学習者が日本語の生成過程における誤用の理解、把握及び指導にささやかな役を果たすことが私の願いである。

注1) 服部四郎『音声学』岩波書店1984p143

注2) 『基礎から学ぶ音声学』鹿島央 p87)

注3) 『よく分かる音声』松崎 寛等 アルク p25)

注4) 『基礎から学ぶ音声学』鹿島央 p26)

注5) 同上 p28)

注6) 広辞苑

参考文献：

1. 『基礎から学ぶ音声学』鹿島央 (スリーエーネットワーク出版)
2. 『よく分かる音声』松崎 寛 河野俊之(アルク出版)
3. NAFL 日本語教師養成プログラム7 『日本語の音声Ⅰ』(アルク出版)
4. NAFL 日本語教師養成プログラム8 『日本語の音声Ⅱ』(アルク出版)
5. NAFL 日本語教師養成プログラム17 『日英の対照研究』(アルク出版)
6. 『対外汉语语音及语言教学研究』北京商務印書館出版 2006年